
イストワール

m e y u u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イストワール

【Nコード】
N3439I

【作者名】
meyuu

【あらすじ】
突然の両親の死。
高校を中退し、ホストへなった優羽。
そこで出会った先輩ハル。
運命の女性との出会い。
優羽の数年間の物語。

〜優羽〜初めてのおっぱぶ〜

希美とデートの約束をしてから何日か過ぎ、約束の日曜日まではもう少しだった。

優羽は希美に告白をしてから、ますます仕事に力を入れ働いていた。

「なんか最近いい事あったのか？」上機嫌の優羽を見てハルが訪ねた。

「イヤ、ベツニ．．」良い事があったと言わんばかりの不自然さだった。

「ふ〜ん」嘘が下手だと思ったハル。

「よし、これから行くぞ。」と言うハル。

「え？これからってどこにですか？」とキョトン顔で優羽は聞いた。

「オッパブ」

真剣に答えるハル。

ハルはマジで優羽を男にするつもりだった。

「これからって仕事は？」若干パニック状態の優羽。

「ホストは常に男磨きを怠ってはいけない、これも仕事だ。」ハルは人差し指を立てながらいった。

「行くぞ！」

と言って控え室を出ていくハル。

キャバクラにはよくハルに連れられて行っていた。自分達と同じように綺麗な女性が相手をしてくれる所。お酒を飲み、話をする場所。おっぱいパブの事はたまにハルから話しを聞いていたが、まさか自分が行くとは思いつかなかった優羽。

優羽は少し考えてからハルの後に続いて、控え室を後にした。

店の裏口を出るとリムジンが停まっていた。

ハルの専属リムジンだ。ハルは帰る時や出かける時は必ずこの車だった。

かなり目立つ。

優羽も何度も乗った事がある。もちろんハルと一緒に時だが。

優羽がリムジンの前まで行くと自動でドアが開いた。中は真っ白のホワホワしたじゅうたんに、細長いガラスのテーブルが置かれている。そのテーブルに添うように、ソファがある。

頭上にはシャンデリアだ。

優羽が中に入ると、ハルが車の最後部のソファに座り、くつろぎながら煙草をふかしていた。

ハルはいつもこの場所に座る。

「おせえ〜よ！」

ハルが怒鳴った。

「すみません。」と言いながら、ハルが座っている近くまで行きソファに腰掛けた。

「お前、ただでさえ童貞なのにちんたらしてんじゃね〜ぞ！」

またまたハルが怒鳴る。

「童貞関係ないじゃないですか。勘弁して下さい。」と少し落ち込みながら優羽は言った。

しばし沈黙。

「おゝほら、お前も吸え」

と煙草を差し出すハル。悪いと思ったのか少しだけ口調がやわらかくなった。

優羽は煙草を一本受け取りマッチに火を付け吸い始めた。

「お前、俺に何か隠してねえか？」と急にハルが真剣な顔をしながら聞いた。

「…」

優羽は希美の事をハルに話そうと思っていたが、なかなかタイミングがなくて言えなかっただけだった。

「はい…ハルさんに隠すつもりはなかったんですけど、なかなか言えなかったんです」と優羽も真剣な顔で答え、ハルの顔色をうかがった。

「続ける」とせかすハル。

優羽は希美の事を全て隠さず話した。

高校の同級生だった事やわざわざバイト代を貯めて自分に会いに来てくれた事、両親が亡くなり高校を中退した自分を心配してくれた事、本気で好きになってしまった事、自分の気持ちを押さえきれなくなり告白した事、日曜日にデートの約束をした事。

黙って聞いていたハルが口を開いた。

「だから最近お前機嫌良かったんだな。自信あんのかよ？」

「自信？」優羽が聞き返した。

「ああ、ホストしながらその子を幸せにする自信はあんのかよ？
中途半端な気持ちだったら、必ず相手不幸にしちまうぞ」ハルが真剣に言う。

優羽は自分の考えが幼稚で恥ずかしくなった。

ただ希美が好きだからとゆう理由だけだったからだ。ハルに言われ、ホストとゆうたくさん女性の相手をしながら、希美を幸せにすると言っるのは確かに簡単ではないだろう。仕事とは言え、客と恋人関係の演技をしたり、手を握ったり、頭を撫でたり、同じグラスで酒を飲んだり。希美以外の女性とそんな事するのは浮気と言っのではないか？希美は全て理解してくれるだろうか？

「はい、自信はあります。必ず希美の事を幸せにします。両方全力でやってみせます。」優羽は嘘をついた。自信はそんなになかった。むしろ、希美が全て理解してくれるかどうか不安になっていた。

「両方全力でやるか。俺にも出来なかった事だぞ、お前に出来るかどうか分かんねえけど、まあやってみるよ」
成功すると良いと言ってるかのように優しくハルが言った。

それからハルは初デートを成功させる方法など細かく教えてくれた。ハルはかわいい後輩に必ず初デートを成功してもらいたかったのだらう。

優羽もハルの優しさを感じ、心から感謝した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3439i/>

イストワール

2010年10月28日03時10分発行